

2021. 9. 19 (日) マタイ26:69~75

26:69 ペテロは外の中庭に座っていた。すると召使いの女が一人近づいて来て言った。「あなたもガリラヤ人イエスと一緒にいましたね。」

26:70 ペテロは皆の前で否定し、「何を言っているのか、私には分からない」と言った。

26:71 そして入り口まで出て行くと、別の召使いの女が彼を見て、そこにいる人たちに言った。「この人はナザレ人イエスと一緒にいました。」

26:72 ペテロは誓って、「そんな人は知らない」と再び否定した。

26:73 しばらくすると、立っていた人たちがペテロに近寄って来て言った。「確かに、あなたもあの人たちの仲間だ。ことばのなまりで分かる。」

26:74 するとペテロは、嘘ならのろわれてもよいと誓い始め、「そんな人は知らない」と言った。すると、すぐに鶏が鳴いた。

26:75 ペテロは、「鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言います」と言われたイエスのことばを思い出した。そして、外に出て行って激しく泣いた。

#### <説教>

主イエス・キリストは、大祭司の前で、ご自分が「神の子キリスト」であること、またやがて「父なる神の右の座に着いて天の雲とともに来る」ご自分の栄光の御姿を力強く証言なさいました(26:64)。

しかし大祭司たちユダヤの最高法院(サンヘドリン)は、そのイエスのことばを信じることなく、神を冒瀆することばとして聞き、イエスのことばは死に値するものだと断定しました(65-66)。

そしてイエスの顔に唾をかけ、拳で殴ったり平手で打ったりして侮辱しましたが、イエスは再び黙って耐え忍ばれました。

そんな、リンチまでも加えられ、ますますその酷さが増し加わった裁判でしたが、その成り行きを見ようと遠くからイエスの後について大祭司の家の中庭まで行き、中に入り、下役たちと一緒に座っていたのがペテロでした(58)。

本日の聖書箇所は、「ペテロ、なんとイエスを三度も否定」というような見出し、内容で考えられることが多いかもしれません。

またそれ故、「なぜペテロは三度もイエスを否定したのか?彼の心理状態はどうだったのか」というようなことに関心が向く人が多いかもしれません。

そういう考察も必要ですが、それだけで終わってしまっただけはもったいないものです。

マタイが焦点を絞って見ているのは、大祭司の前で大胆に宣言なさった栄光の主であり、ペテロがつまずき、ペテロから「そんな人は知らない」(72,74)と言われたお方である、苦難の「神の子キリスト」イエスなのです。

ご自分が「最後まで愛された」(ヨハネ 13:1)弟子たちすべてから見捨てられ(56)、一番弟子のペテロからは徹底的に三度も否定されたのですが、そのこともまたイエスが「神の子キリスト」として受けなければならなかった苦難の一部でした。

<ペテロは、「鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言います」と言われたイエスのことばを思い出した。そして、外に出て行って激しく泣いた。>(75)とあります。

ペテロに向かってイエスは既に「まことに（アーメン）、あなたに言います。あなたは今夜、鶏が鳴く前に三度わたしを知らないと言います。」と言っておられました（34）。

ペテロは、「たとえ皆があなたにつまずいても、私は決してつまずきません。」（33）、「たとえ、あなたと一緒に死ななければならないとしても、あなたを知らないなどとは決して申しません。」（35）と言い張ったのですが、実は自分のこと（弱さ、罪深さ）さえも知らなかったのです。

しかし、イエスはペテロの心も言葉も行動も見抜いておられ、知っておられました。

もちろん、ペテロがイエスを三度否定するようにイエスがペテロを導いたからペテロがそう言ったのではありません。

ペテロが三度イエスを否定したのはどこまでもペテロの罪、弱さの故であり、イエスに対して他の誰に対しても責任転嫁できないことでした。

ペテロが自分の罪、弱さの故に、自分の責任で「三度イエスを知らないと言う」ことをイエスは知っておられたのです。

その意味で、確かに〈言われたイエスのことば〉の通りになった、それゆえ確かにイエスは力ある神の子（即ち神）でありキリストだということをマタイは示しているのです。

三度目の否定の時について、〈しばらくすると〉（73）とマタイは（マルコも）記していますが、ルカは〈それから一時間ほどたつと〉（ルカ 22:59）と記していますので、三度の否定は短時間のうちにではなく、ある程度の時間をかけてなされたようです。

初め大祭司の家の中庭まで行き（58）、〈外の中庭に座っていた〉（69）ペテロは〈何を言っているのか、私には分からない。〉とごまかした後、〈入り口まで出て行く〉（71）ような行動もしています。

そんな行動もしたペテロがなお一時間以上もの間どんな思いでいたのか、想像はいろいろできますが、本当のところはわかりません。

ただ、〈ペテロは、…イエスのことばを思い出した〉ということは、このときペテロはそれまで〈イエスのことばを〉忘れていたということだけは確かです。

最初の「何を言っているのか、私には分からない。」とのごまかしに始まって、二度目の〈誓って、「そんな人は知らない」と再び否定した〉（72）という嘘の重ね塗り、そしてついに〈嘘ならのろわれてもよいと誓い始め、「そんな人は知らない」と言った〉（74）という徹底的な嘘、決定的なイエスの否定にペテロは行き着いてしまいましたが、この間ペテロにはっきりとした罪の自覚の様子は見られません。

しかし、〈すぐに鶏が鳴いた〉ことで事が急展開し、ペテロはやっと我に戻ります（cf. ルカ 15章のいわゆる「放蕩息子」の話）。

ペテロは自分の力で我に戻ったのではありませんでした。

〈鶏が鳴いた〉ことがきっかけで、そこからそれまで忘れていた〈イエスのことばを思い出した〉のであり、そこから自分が三度イエスを否定したことを思い起こし、やっと本当の意味での罪の自覚に至ったのです。

ペテロがそうだったように、私たちが罪を本当に罪として知るのは、また自分の罪深さ弱さを本当に知るのは、いわば心の闇を知り葛藤が始まるのは〈イエスのことば〉（言い換えれば聖書に書かれたみことば）を〈思い出〉すときなのです。

思い出すためにはまずはとにかく聞かなければなりません（たとえそのときはわからな

くても、また反発を感じたとしてもです)。

ペテロも予め聞いていたから(そのときは反発し否定しましたが)思い出したのです。

〈イエスのことば〉、聖書のみことば無しでは本当の意味での罪の自覚はできないし、〈罪の報酬は死〉であることも知ることができませんし、〈私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのち〉という〈神の賜物〉(ローマ 6:23)を知ることもできません。

〈イエスのことばを思い出した〉ペテロは〈外に出て行って激しく泣いた〉のです。

これは確かにペテロが大いに「後悔した」ことを示してはいますが、〈激しく泣いた〉ことをもってこのときペテロが「十分に悔い改めた」とはやはり言えないでしょう。

ペテロの確かな悔い改め、立ち直り(ルカ 22:32)も復活の主イエスにより、〈イエスのことば〉によって、後になされるのです(ヨハネ 21 章等)。

とはいえ、〈イエスのことばを思い出した〉ペテロが〈外に出て行って激しく泣いた〉そのときも、ペテロを完全に知っておられ、「わたしはあなたのために、あなたの信仰がなくならないように祈りました」(ルカ 22:32)とみことばをお語りになったお方が、「苦難と栄光」の主イエス・キリストが、ペテロを守り助け支えておられたのです。